

2023年7月13日

**アフターコロナにおける生活者の意識変化が判明
『住まいの暮らしやすさに関する調査』を実施**

～40歳代男女では、コロナ禍で増えた家事について意識格差が顕著に～

パナソニックホームズ株式会社の「くらし研究室」では、このたび、生活者の住まいにおける暮らしやすさの意識がコロナ禍のさなかと後^{*1}でどう変化したのかについて、『住まいの暮らしやすさに関する調査』を2023年5月に実施、結果をまとめました。

同調査で、男女間の意識格差が最も顕著な項目は、「コロナ禍で増えた家事」でした。40歳代男性の78.0%が「コロナ禍前と変わらない」と回答した一方、40歳代女性の回答は46.0%に留まり、男性と女性では意識に大きな乖離が見られました。共働きが増え、男女関係ない家事参画が一般化した現代においても、家事の負担感では大きな性別差があると言えます。

一方で、住まいにおける暮らしやすさに寄与する要素は、コロナ禍のさなかと後で変わりはなく、「家事のしやすさ(家事動線等)」「収納」「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」が重要視されていることが分かりました。

今回の調査から、コロナ禍を通して、家事については男女それぞれの意識に大きくギャップが生じた反面、「住まいの暮らしやすさに大きく影響する要素」については、コロナ禍に関係なく意識に変化はないことがあらためて確認できました。

当社の「くらし研究室」は、さまざまな調査を通して、家事の効率化の取組み「家事楽」^{*2}やライフステージの変化に合わせて間取りを変えられる「先読み設計」の考え方を長年にわたって研究してきました。今後も、時代の変化、生活者のくらし方や価値観の変化に合わせて「家事楽」・「先読み設計」の進化・拡充を図り、より良い住まいの提案に繋げてまいります。

■『住まいの暮らしやすさに関する調査』結果サマリー**①コロナ禍を経て“変わった”暮らしの意識**

- ✓「コロナ禍で家事負担感が増えたか」という設問に対し、「変わらない」と回答したのは40歳代の男性(78.0%)が最も多く、40歳代女性(46.0%)が最も低かった。約30ptの差が、男女の意識差を顕著に表している。
- ✓「コロナ禍で最も増えた家事」では、「料理」(26.7%)が最多。
「料理」の負担感は、女性が男性に比べ13ptも高い。
特に男女差が大きかったのは40歳代で、24ptも差がある。

②コロナ禍を経ても“変わらない”暮らしの意識

- ✓「家事のしやすさ(家事動線等)」「収納」「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」は、80%以上が「住まいにおける暮らしやすさにつながると思う」と回答。コロナ禍に関係なく、暮らしやすさに重要な要素は不変。

■調査概要

調査対象: 全国の20歳～69歳の男女

調査期間: 2023年5月17日(水)～2023年5月18日(木)の2日間

サンプル数: 1000人(性年代均等割付)

調査方法: Webアンケート調査(ネオマーケティング)

※n=30未満は参考値として記載

■当社の「暮らし研究室」について

日々の家事の負担を軽くするには? もっと便利な収納とは? 様々な側面から住まいと暮らしについて調査・研究を実施しています。世の中やライフスタイルの変化の兆しを読み取り、暮らしのアイデアをカタチにする活動を続け、より良い住まいの提案に繋げていきます。



「暮らし研究室」ホームページ

<https://homes.panasonic.com/kurashi-lab/>

◎「家事楽スタイル」の詳細はこちら

<https://homes.panasonic.com/sumai/lifestyle/kajiraku/>

※1: 2021年(コロナ禍中)と2023年(コロナ禍後)の比較

※2: 「家事楽」は、パナソニック ホームズ株式会社の商標

* 本件に関するお問い合わせ先 *

パナソニック ホームズ株式会社 宣伝・広報部 広報課 井筒

TEL: 080-8535-6640 / E-mail: izutsu.katsuhiko@panasonic-homes.com

HP: <https://homes.panasonic.com/company/news/release/>



パナソニック ホームズは 2023 年に創業 60 周年を迎えます。これまでの「感謝」を新たな「挑戦」への力に変えて、暮らしを起点に事業活動を拡げます。お客さま一人ひとりに寄り添い、心豊かな暮らしと持続可能な社会の実現を目指し、邁進してまいります。

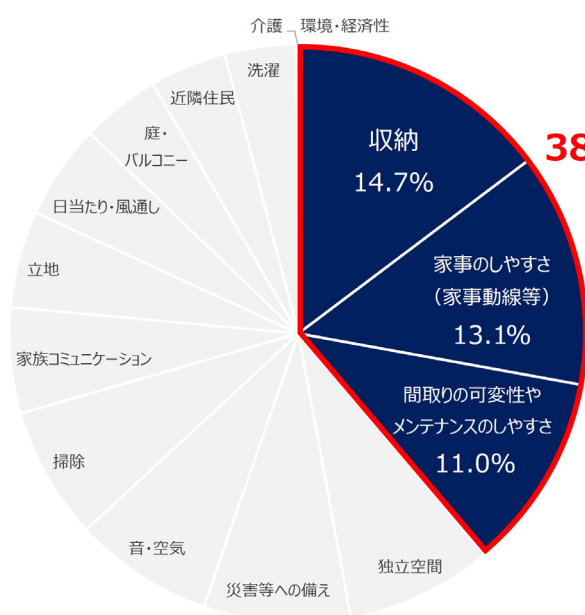
ご参考

■『住まいの暮らしやすさに関する調査』実施の背景

当社の「暮らし研究室」は、生活者にとっての「住まいにおける暮らしやすさ」が何によって決まるのかを把握するため、2021年に「住まいの暮らしやすさに関する調査」を実施。

その結果、因子分析及び重回帰分析による解析から、生活者が感じる暮らしやすさが15の要素に分類され、暮らしやすさへの影響度の大きさが、「収納」(14.7%)「家事のしやすさ(家事動線等)」(13.1%)「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」(11.0%)と3つの要素で全体の約4割を占める結果となり、暮らしやすさに欠かせない要素であることが分かりました。

図1 2021年 住まいにおける暮らしやすさの15要素



2021年 住まいの暮らしやすさに関する調査概要
調査対象：全国の20歳～69歳の男女
調査期間：2021年7月30日（金）～8月2日（月）の3日間
サンプル数：1041人
調査方法：Webアンケート調査（マクロミル）

コロナ禍を経て、テレワークや在宅教育環境の浸透が急速に進み、通信販売など消費行動のデジタル化にもより拍車がかかることとなりました。これらがきっかけとなり、今まで家の外で行ってきたことを家の中で完結でき、住まいの中での生活行為がより多様化しました。

私たちの暮らし方を大きく変えたコロナ禍を経て、住まいの中で感じる暮らしやすさにも変化があらわれたのか、今回、調査を実施しました。

■「コロナ禍で家事負担感が増えたか」という設問に対し、「変わらない」と回答したのは40歳代の男性(78.0%)が最も多く、40歳代女性(46.0%)が最も低い結果となりました。約30ptの差が、男女の意識差を顕著に表しています。

「コロナ禍で増えた家事」を見ると、「特にない」と回答した人が62.3%(図2)となりました。性別で比較をすると、女性は家事が増えたと感じている方が多いことが読み取れます。「特にない」と回答した人をさらに性年代で比較をすると、40歳代の男女のポイント差が最も大きい結果となっています。共働き家族が増え、男女平等に家事を行うことが当たり前の時代と言われますが、まだまだ男女の家事負担意識には差があるようです。

- 「コロナ禍で最も増えた家事」では、「料理」(26.7%)が最多。
「料理」の負担感は、女性が男性に比べ 13pt 高い。
特に男女差が大きかったのは 40 歳代で、24pt の差がある。

「コロナ禍で増えた家事」の中では、在宅時間の増加や、外食の機会の減少が影響したためか、「料理」が26.7%(図2)と最も多い結果となりました。
性別で比較をすると、女性は男性に比べ13pt高く「料理」の負担が増えたと感じており、年代別で見ると、特に男女差が大きかったのは40歳代で、24ptの差がありました。

図2 コロナ禍で増えた家事(複数回答)

	料理	掃除	洗濯	生活環境の 保守	収納・ 整理整頓	家計管理	育児・介護	その他	特になし
全体 (n=1000)	26.7%	17.4%	15.2%	9.1%	8.4%	5.5%	3.7%	1.0%	62.3%
全体	男性 (n=500)	20.2%	12.4%	12.2%	6.2%	4.8%	2.4%	0.6%	70.0%
	女性 (n=500)	33.2%	22.4%	18.2%	12.0%	12.0%	6.4%	5.0%	54.6%
20代	男性 (n=100)	23.0%	13.0%	12.0%	3.0%	7.0%	9.0%	2.0%	64.0%
	女性 (n=100)	23.0%	21.0%	14.0%	4.0%	8.0%	2.0%	1.0%	65.0%
30代	男性 (n=100)	20.0%	15.0%	15.0%	8.0%	5.0%	5.0%	3.0%	71.0%
	女性 (n=100)	36.0%	24.0%	24.0%	13.0%	14.0%	11.0%	12.0%	55.0%
40代	男性 (n=100)	15.0%	11.0%	7.0%	5.0%	2.0%	2.0%	3.0%	78.0%
	女性 (n=100)	39.0%	25.0%	24.0%	10.0%	15.0%	7.0%	8.0%	46.0%
50代	男性 (n=100)	19.0%	10.0%	11.0%	7.0%	5.0%	3.0%	4.0%	69.0%
	女性 (n=100)	35.0%	18.0%	8.0%	10.0%	7.0%	4.0%	1.0%	54.0%
60代	男性 (n=100)	24.0%	13.0%	16.0%	8.0%	5.0%	4.0%	0.0%	68.0%
	女性 (n=100)	33.0%	24.0%	21.0%	23.0%	16.0%	8.0%	3.0%	53.0%

また、「家事のしやすさを100点にするために必要だと思うこと」については、「家事の動線」や「設備」はもちろん、「家族の協力」や「もっと家電に頼るべきだ」という回答もありました。

図3 自宅の「家事のしやすさ」を100点にするために必要だと思うこと(自由回答)

- ・家事を楽にする家電を取り入れること。(女性/20歳/千葉県)
- ・台所の高さ等が昔サイズで自分に合わず、腰が痛くなったりする。これを改善したい。(男性/40歳/長崎県)
- ・家族みんなで家事に取り組むこと。(女性/45歳/岩手県)
- ・家族の協力(女性/46歳/福岡県)
- ・もっと家電を使って楽にする。(女性/51歳/広島県)
- ・家事をあまりしないのでわからない。(男性/66歳/広島県)

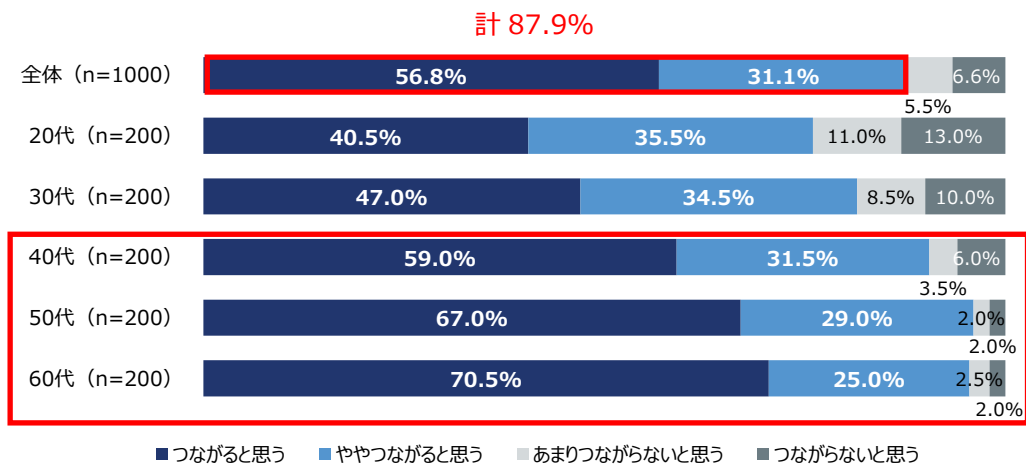
今回の結果では、他の家事以上に「料理」が自身や家族の在宅時間に影響していることが分かりました。これは、コロナ禍の外出自粛等による在宅時間の増加に伴い、今まで職場や学校等で済ませていた食事の準備や片付け等の負担が増えたこと等が要因として想定され、興味深い結果となりました。また自由回答からも見て取れるように、コロナ禍を機に、家事に対するお困り事や要望が顕在化したのではないのでしょうか。

家事分担がうまくできていない家庭向けには、家族みんなで家事をして負担を減らす提案が有効です。より家族の参加を促す工夫、家事を家電に任せることや、外部サービスを活用しやすい工夫など、誰もが家事をしやすい工夫が求められていると考えます。

■「家事のしやすさ(家事動線等)」「収納」「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」は、80%以上が「住まいにおける暮らしやすさにつながると思う」と回答。コロナ禍に関係なく、暮らしやすさに重要な要素は不変。

「住まいにおける暮らしやすさに重要な3つの要素」について、「暮らしやすさにつながると思うか」を聞きました(図4)。その結果、「家事のしやすさ(家事動線等)」は暮らしやすさにつながると思うと87.9%が回答しました。年代で比較をすると、40歳代以上は9割以上が「つながると思う」「ややつながると思う」と回答しています。

図4 「家事のしやすさ(家事動線等)」は暮らしやすさにつながると思うか(単数回答)



また、「収納」は86.4%(図5)、「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」は80.5%(図6)で、3つの要素が変わらず暮らしやすさにつながると感じている人が多いことがわかりました。

図5 「収納」は暮らしやすさにつながると思うか(単数回答)

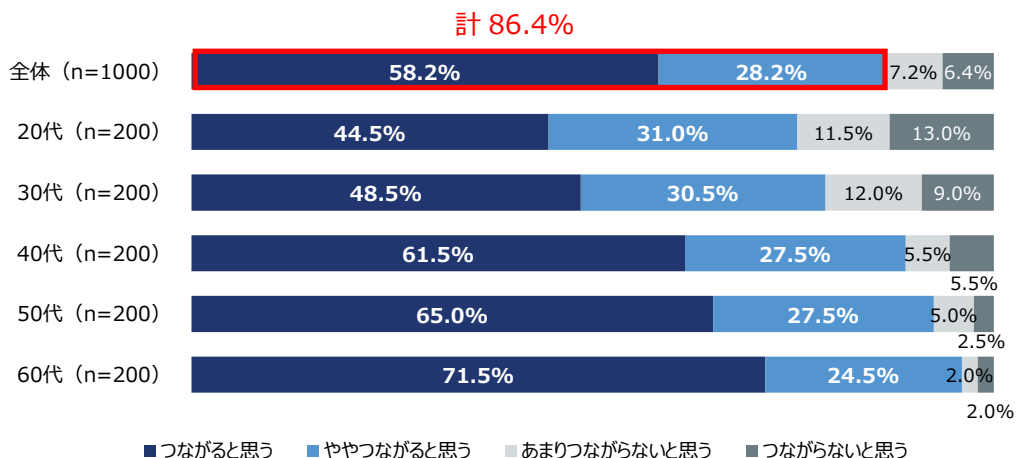
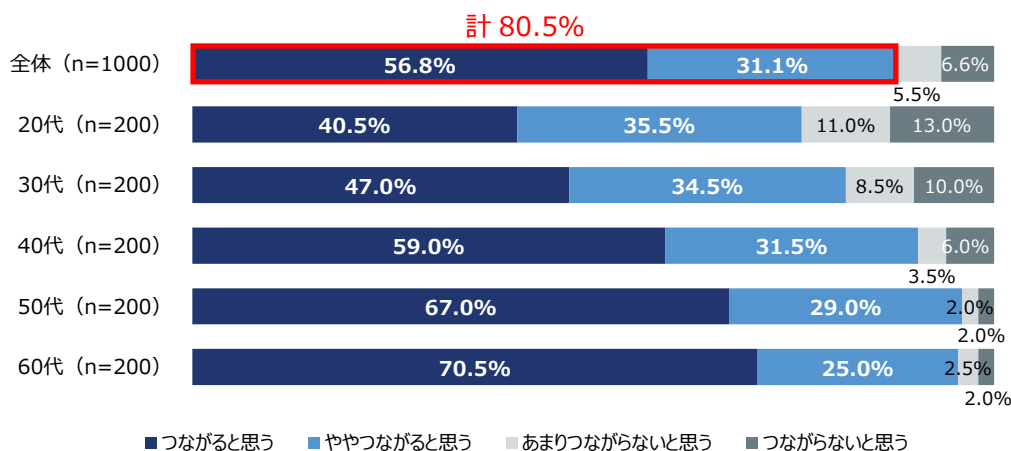


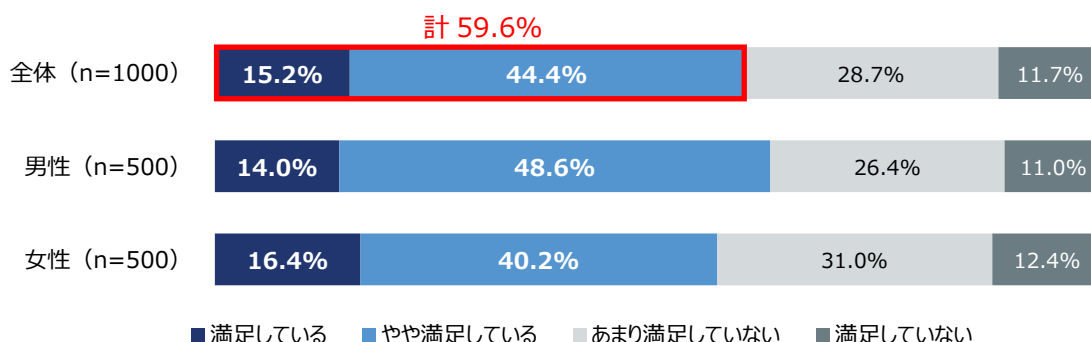
図6 「間取りの可変性やメンテナンスのしやすさ」は暮らしやすさにつながると思うか(単数回答)



コロナ禍を経て、暮らし方は大きく変わったと言われますが、生活者が住まいに対して求める暮らしやすさの本質的な部分は変わらないことが今回あらためて分かりました。今後もこの3つの要素は住まいを考える上で重要な研究テーマだと考えます。ただし、時代の変化と共に、「家族の家事への関わり方」や収納する対象となる「持ち物」、「住まいの中で家族が過ごす場所」は徐々に変化するため、その変化を的確に捉え、その時代が可能にする新しい解決策を提案し続ける必要があると考えています。

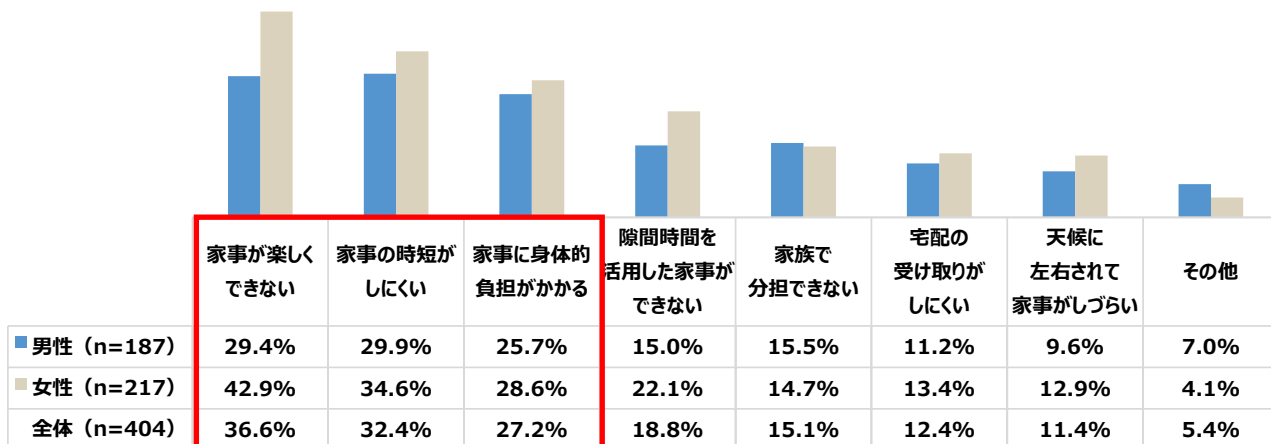
3つの暮らしやすさの要素の中で、回答した方が最も多い「家事のしやすさ(家事動線等)」について、現在のお住まいを評価してもらうと、「満足している」、「やや満足している」と回答した人は59.4% (図7)である一方、約4割の方は重要と思いながらも、今の生活には満足していないようです。

図7 現在の住まいの「家事のしやすさ(家事動線等)」に満足しているか(単数回答)



「どのような点で満足していないか」をお聞きすると、男性は1位「家事の時短がしにくい」(29.9%)、2位「家事が楽しくできない」(29.4%)、3位「家事に身体的負担がかかる」(25.7%)の順となりました。女性は1位「家事が楽しくできない」(42.9%)、2位「時短がしにくい」(34.6%)、3位「家事に身体的負担がかかる」(28.6%) (図8)という順となっており、上位3つの項目は男女同じ結果となりました。

図8 「家事のしやすさ(家事動線等)」で満足していない点(複数回答)



「家事が楽しくできない」について、女性では約4割、男性でも約3割の回答があり、ただ家事の負担を軽減する、効率化するというだけでなく、家事自体を楽しく行いたいという要望の声も新たに確認できました。例えば、毎日の家事をお気に入りの空間で気持ちよく行える工夫や、家族と一緒に楽しめる工夫、最新の設備や家電を上手に取り入れる等、柔軟な発想での家事空間の提案が求められていると考えます。

今回の調査より、コロナ禍を経ても家事に対する意識が変わらない要素をあらためて確認できました。3つの要素はより良い住まいの提案に向けて継続的に取り組むべき研究テーマです。今後も常に暮らしの兆しを捉え、特に、当社が長年研究に取り組んでいる「家事楽」や、ライフステージの変化に対応する「先読み設計」の考え方を進化させていきます。

■当社が提案する「家事楽」について

私たちは、長年にわたり家事がしやすくなる住まいの研究に取り組んできました。たどりついたのは、子どもも含め家族がチームになってリレーのように協力しあい、その時間を楽しめることが大切だということ。

家事のスタイルは十人十色。“誰でも、いつでも、苦手でも”家族みんなが家事に参加できるような工夫やアイデアを。そんな想いをぎゅっと詰め込んだパナソニック ホームズの「家事楽スタイル」を提案しています。

●「家族みんなが動きやすい動線」

調理や洗濯など短い動線で家族の動線が重ならない効率的な配置へ。



いっしょに動きやすいから 自然とお手伝い

お料理をしている人と、お手伝いする人の動線の重なりを解消することで、キッチン周りをスムーズに行き来できます



●「家族みんながわかりやすい定位置」

集う場所、使う場所の近くに収納を設け、片付け方や場所を家族で共有できる工夫を。



**家族が使う物を
一か所にまとめて収納**

家族が使う物を一か所にまとめて収納すれば、いざという時に「どこに片付けたかわからない」というトラブルが減らせます

